

Amartya Sen 教授の略歴および業績

略歴

アマーティア・セン教授は 1933 年インドのベンガル州サンチニケタン (Santiniketan) 生まれ。1953 年カルカッタ大学学士、1955 年英国ケンブリッジ大学学士、1959 年ケンブリッジ大学博士取得。1956 年よりカルカッタのジャダプル大学 (Jadavpur University) 経済学教授、1957-63 年ケンブリッジ大学トリニティー・カレッジ・フェロー。1963 - 1971 年、インド・デリー大学経済学教授。1971 - 1977 年、英国ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス教授、1977-1980 年英国オックスフォード大学ナフィールド・カレッジ・フェローおよび経済学教授、また 1978-84 年には、米国コーネル大学アンドリュウ・D・ホワイト教授 (Andrew D. White Professor) を兼任。1980 - 1988 年英国オックスフォード大学オール・ソウルズ・カレッジ・フェローおよびドルモンド政治経済学教授 (Drummond Professor of Political Economy)、1988 - 現在、米国ハーバード大学経済学教授 (Lamont University Professor) および哲学教授。

この間、数々の要職を歴任し、多くの名誉を与えられてきた。主たるものは次の通りである。英国アカデミー・フェロー (1982 年)、エコノメトリック・ソサイエティー・フェロー (1968 年) および同会会長 (1983 年)、国連熟練労働および技術に関する専門家会議議長 (1967 年)、国際開発経済学会会長 (1980 - 82 年)、インド・マハラノビス (Mahalanobis) 賞受賞 (1976 年)、米国経済学会名誉会員および同会会長 (1994 年)。

業績とその評価

セン教授の業績は幅広い分野に及ぶが、あえて要約すれば、(1)経済学の基礎となる諸前提の再検討とその哲学的意義づけ、(2)人類全体の重要問題である、経済発展、不平等、貧困、生活水準、人口、女性問題などに対する理論的、実証的、実践的貢献、ということになるだろう。具体的には以下の三点が重要である。

(1)厚生経済学、特に社会的選択論における貢献。これはセン教授の主著である *Collective Choice and Social Welfare* (Holden-Day, 1971; 2nd ed, North-Holland, 1979) や影響力の大きかった論文 “The Impossibility of Paretian Liberal”, *Journal of Political Economy*, 1970 などに代表される業績であるが、この中でセン教授はアロー教授 (スタンフォード大学、1972 年ノーベル経済学賞受賞) が論じた社会的選択論を、倫理学・政治学的課題である自由や権利といった問題と結びつけ、その議論を一層深化させると同時に、効用の比較可能性が社会的選択論における倫理的問題を解く鍵であることを厳密に証明した。その後も、*Handbook of*

Mathematical Economics, Econometrica, Economica, など主要な学術雑誌、論文集にこの分野での研究を発表している。とりわけ1980年代以降は、経済理論の基本的命題ともいえる個人的合理性を限定的な利潤最大化、効用最大化の中で考えることには限界があり、習慣、評判、同情、共感などの社会倫理的な側面なども含めたより広い意味での社会制度の中で、個人的選択の動機を考える必要があるという議論を展開している（この点に関する主要な論点は“Rational Fools: A Critique of The Behavioural Foundations of Economic Theory”, *Philosophy and Public Affairs*, 6, (邦訳「合理的な愚か者：経済学=倫理的探求」大庭健・川本隆史訳、勁草書房、1989年)や“Internal Consistency of Choice”, *Econometrica*, 1993などに見られる)。

(2)経済的不平等、貧困、実質国民所得、失業、生活水準などの経済概念の測定方法に関する貢献。セン教授は社会的選択論を抽象的な議論にとどめるのではなく、具体的な経済問題に対する応用にも大きな関心を寄せてきた。この分野でのセン教授の貢献は著書 *On Economic Inequality*, Oxford University Press, 1973 (邦訳「不平等の経済理論」杉山武彦訳、日本経済新聞社、1977年)、*Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Oxford University Press, 1981、*Commodities and Capabilities*, North-Holland, 1985 (邦訳「福祉の経済学：財と潜在能力」鈴村興太郎訳、岩波書店、1988年)、*The Standard of Living*, Cambridge University Press, 1987、*Inequality Reexamined*, Oxford University Press, 1992、*The Quality of Life*, 1993, Oxford University Press などに集約されている。これらの研究の中で、セン教授は厳密な公理系から経済指数を導出することで、それらの指数の前提となっている価値判断を明らかにした。ここでは指数問題や比較可能性問題が深く検討されている。とりわけ、貧困の程度を測定する指数はセン教授が初めて定式化し、その後の研究に大きな影響を与えた。また、生活水準を単に財の獲得によって計るのではなく、それをどのように使うことができるかという可能性の多様性(潜在能力)によって測定すべきであるという考え方も、国連開発プログラム(UNDP)の人的開発指数(Human Development Index)に応用され、毎年の国連人的開発報告書(*Human Development Report*)に掲載されている。

(3)経済発展論に関する貢献。セン教授は研究活動の第一歩を経済発展における技術選択の問題を論じることから始めている(その結果は、博士論文であり最初の著作となった *Choice of Techniques*, (Blackwell, 1960, 3rd ed, 1968)に集約されている)。その議論の骨子は、今日、最適成長論として知られているものに対応しており、消費と投資、とりわけ技術選択を含む投資の内容の違いが、将来の経済成長にどのように影響を与えるかを論じたものである。セン教授はこの研究を進展させ、投資の収益性を測定する道具としての費用便益計算の方法論

的基礎を与えた(Partha Dasgupta (ケンブリッジ大学) と Stephen Marglin(ハーバード大学)とともに国連産業開発機構 (UNIDO) の依頼で行った共同研究は *Guidelines for Project Evaluation*, United Nations, 1972 として発展途上国の投資プロジェクトに対する費用便益計算の最も基礎的な文献となっている)。また、セン教授は、国連大学によってヘルシンキに設置された The World Institute for Development Economics Research (WIDER) を拠点に、世界中で発生してきた飢饉の政治経済学的研究を組織し、重要な研究成果を次々と発表してきた (WIDER による、これまでの主な出版物には *Hunger and Public Action*, Oxford University Press, 1989 (with Jean Drèze)、*The Quality of Life*, Oxford University Press, 1993 (with Martha Nussbaum)、*The Political Economy of Hunger*, Oxford University Press, 1995 (with Jean Drèze, Athar Hussain) などがある)。英国経済紙ファイナンシャル・タイムズはセン教授の飢饉に関する一連の研究にたいして、「これらの研究によって数百万人の人命が救われるのであれば、経済学の人類に対する最大の貢献の一つとなろう」という最大の賛辞を贈っている。

さらにセン教授は発展途上国における女性の地位や民主主義のあり方、人口問題などについても精力的に研究し、色々な場で積極的に発言してきた。このように、セン教授の研究は、国連を中心とした経済開発政策の方向性を決める上で決定的な影響力を持ってきたといっても過言ではない。

主要著書

Choice of Techniques, Blackwell, 1960, 3rd ed, 1968

Collective Choice and Social Welfare, Holden-Day, 1971; 2nd ed, North-Holland, 1979

Guidelines for Project Evaluation, United Nations, 1972 (with Partha Dasgupta and Stephen Marglin)

On Economic Inequality, Oxford University Press, 1973

Employment, Technology and Development, Oxford University Press, 1975

Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation, Oxford University Press, 1981

Commodities and Capabilities, North-Holland, 1985

The Standard of Living, Cambridge University Press, 1987

Hunger and Public Action, Oxford University Press, 1989 (with Jean Drèze)

Inequality Reexamined, Oxford University Press, 1992

The Quality of Life, Oxford University Press, 1993 (with Martha Nussbaum)

The Political Economy of Hunger, Oxford University Press, 1995 (with Jean Drèze, Athar Hussain)

1996年10月8日
北村行伸

1984年以前の主要論文は次の二冊の論文集に収録されている。

Choice, Measurement and Welfare, Blackwell, 1982.

Resources, Values and Development, Blackwell, 1984